

東アジア児童文学のゆくえ④

—『夏の庭』、そして東アジアの戦争児童文学について

成實 朋子

*南京一九三七

「南京」に親しみを持つ日本人は少ないのではないだろうか。外務省の「海外在留邦人数調査統計平成二八年」によれば、二〇一五年時点での南京の在留邦人数はわずか五七六人。同じ江蘇省内の蘇州が六八二六人、中国で在留邦人が最も多い上海が四六一一五人であるから、都市規模を考へれば、この数は相当に少ない。これはつまり、日本人が、「南京」を忌避しているということの意味している。

けれど私にとって、「南京」は大切な思い出の街だ。一九九二年から一年間、私は国費留学生として南京師範大学に留学した。南京師範大学は外国人向け中国語指導の拠点大学の一つなので、そこには、文字通り世界各地からの留学生が集まっていた。当時は特に第三世界からの留学生が多く、アフリカ諸国や東南アジアからの留学生が目立っていた。今から思えば、それもまた後の中国政府の「一帯一路」政策につながる小さな布石の一つであったのだろう。

ちようど一九九二年に中国と韓国の国交が正常化したこともあって、韓国と北朝鮮の留学生が共にいて、仲良く交流していたことも印象的だった。大使館も無く、お目付け役も減多にやって来ない南京で、北朝鮮の学生たちも随分のんびりと過ごしていたように見えた。あの頃は、もう一〇年もたてば、南北統一は難しいまでも、ある程度の往来は許されるようになっていっていると信じていたのに……。

当時留学生は学内に住まわなければならない規則であったため、私たちは皆学内の小高い丘の上にある南山賓館という宿舎に住んでいた。南京にいる間、日本人だからといって、差別的な待遇を受けたことは全く無い。むしろ色々気遣ってくれるのを、すまなく思ったくらいだ。古くから幾つもの王朝の都となってきた南京は、鷹揚に異国からの留学生たちを受け止め、私たちは実に愉快に過ごした。

だがいつの頃からだろうか、南京での思い出が光輝くほどに、その影が気になるようになってきた。ちようど、春